

外見修正 (Appearance Fixing) が醜形恐怖心性に及ぼす影響 —身体不満足感を媒介して—

渡嘉敷みどり*・伊藤 義徳**・友利 彰吾***・市井 雅哉****

醜形恐怖症 (Body Dysmorphic Disorder ; BDD) は、自身の容姿について異様に醜いと悩む病態であり (鍋田, 2004), 健常者における軽度のBDD特性を醜形恐怖心性と呼ぶ (大村ら, 2015)。醜形恐怖心性を持つ者は、外見の気になる部分を過度に隠したり変えたりする傾向が強いとされている。本研究では大学生を対象に醜形恐怖心性における外見修正の影響を検討することを目的に調査を行った。研究 I では329名の大学生を対象に外見修正を測定するための尺度 (BICSI) の日本語版を作成した結果、概ね十分な信頼性及びある程度の妥当性が見られた。また、研究 II においては340名の女子大学生を対象に身体不満足感を媒介変数として、外見修正が醜形恐怖心性に及ぼす影響を媒介分析によって検討した結果、容姿に対する評価懸念において媒介が示された。つまり良かれと思って外見修正をすることで、容姿への否定的感情が強まり、かえって醜形恐怖心性を高めてしまうといったプロセスが確認された。外見修正が安全行動であることが明らかにされたことによって、外見修正に焦点を当てた介入の可能性が広がる点においても意義のあるものと考察した。

キーワード：醜形恐怖症, 外見修正, 身体不満足感

背景・目的

醜形恐怖症 (Body Dysmorphic Disorder ; BDD) は、自身の容姿について異様に醜いと悩む病態である (鍋田, 2004)。近年、大学生においても軽度のBDD症状が認められ、BDDは連続性を有する疾患であることから (Lambrou et al., 2012), 大村ら (2015) は「健常者における自己の容姿に対する強いこだわりであり、容姿全体あるいは一部分に強い関心を向ける特性」を醜形恐怖心性と命名した。醜形恐怖心性を持つ者は、外見の気になる部分を過度に隠したり変えたりする傾向が強いとされている。しかし、これらの行動は、かえってコンプレックスを強めてしまうことがある (高坂, 2017)。社交不安症 (SAD) の認知モデルにおいて、恐怖場面内での不安を軽減

させるための行動は安全行動と呼ばれ、一時的には不安を軽減させる一方で、SAD症状をかえって持続させることが明らかとなっている (Clark & Wells, 1995)。BDDや醜形恐怖心性における安全行動としては「外見修正 (Cash et al, 2005)」が該当すると考えられる。本研究では、外見修正と醜形恐怖心性の媒介要因として、外見修正やBDDとの関連が示されている「身体不満足感 (安保ら, 2012)」に注目する。身体不満足感とは「ボディイメージの下位概念であり、体重・体型に限定しない、あらゆる身体的特徴に対する否定的な感情ならびに思考および評価」である。外見修正をすることによって、かえって身体不満足感を高め、醜形恐怖心性を維持させるといった一連のプロセスが考えられる。以上のことから、本研究の目的として研究 I において、外見修正を測定するための尺度 (BICSI : the Body Image Coping Strategies Inventory) の日本語版を作成し、尺度の信頼性・妥当性の検討を行い、その後研究 II において身体不満足感を媒介変数として、外見修正

* 兵庫教育大学学校教育研究科臨床心理学コース

** 琉球大学人文社会学部人間社会学科心理学プログラム准教授

*** 琉球大学人文社会学部科学研究科人間科学専攻博士課程

**** 兵庫教育大学発達心理臨床研究センター

が醜形恐怖心性に及ぼす影響の検討を行う。研究Ⅱにおいて「①外見修正は身体不満足感を媒介して醜形恐怖心性合計に影響を及ぼす」、「②外見修正は身体不満足感を媒介して容姿に対する評価懸念に影響を及ぼす」、「③外見修正は身体不満足感を媒介し容姿に対する関心集中に影響を及ぼす」の仮説を立て、その検証を行った。

研究Ⅰ

方法

1. J-BICSIの作成

BICSIの原著者Cash T.Fからの翻訳許可を得た後、原著者との修正作業を数回行い翻訳を行った。

2. 調査参加者

大学生329名（男性161名，女性166名，その他2名， $M=19.66$ 歳， $SD=1.39$ ）。

3. 調査期間

2019年11月5日～11月25日

4. 指標

①フェイスシート，②日本語版BICSI原項目（自作），③J-BICI：日本語版 Body Image Concern Inventory（田中ら，2011），④ASI-R：日本語版 Revision of Appearance Schemas Inventory（安保ら，2012），⑤自尊感情尺度（桜井，2000），⑥EAT-26：日本語版Eating Attitudes Test-26（向井ら，1994）を使用した。

5. 手続き

調査者の教示のもと講義時間内に集団一斉方式で実施した。

結果

1. 日本語版BICSI（以下J-BICSI）の作成

原尺度の3因子構造を仮定し確証的因子分析を行ったが、適合度が不十分であった。そのため、本項目を用いてより適合度の高い尺度構成を目指し、I-T相関の結果から.20以下の1項目を除外し、多様な因子モデルを検討した結果、最終的に3因子28項目が最も適合度の高いモデルとして採用された（ $GFI=.816$ ， $RMSEA=.07$ ）。

2. 信頼性の検討

探索的因子分析を行い、最終的に採用された28項目3因子のJ-BICSIの信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、尺度全体の信頼性係数は $\alpha=.881$ であり、「外見修正」因子が $\alpha=.872$ 、「積極的受け入れ」因子が $\alpha=.865$ 、「回避」因子が $\alpha=.747$ であり、十分な値であると判断された。探索的因子分析の因子別項目内容と各項目の因子負荷量をTable 1に示す。

3. 構成概念妥当性の検討

原尺度で構成概念妥当性を検討するために用いられた指標を参考に、本研究で作成したJ-BICSIの3下位尺度と、ボディイメージを測定する指標であるJ-BICI，外見スキーマを測定する指標であるASI-R，自尊感情を測定する指標である自尊感情尺度，食行動を測定する指標であるEAT-26との関連を明らかにするため、各指標間のPearsonの相関係数を算出した（Table 2）。その結果、「外見修正」や「回避」においては先行研究と概ね同様の結果が得られたが、女性においてのみ、「積極的受け入れ」とボディイメージ不満との間で有意な相関がみられなかった。

4. ボディイメージ対処方略の性差の検討

本研究Ⅰにて作成したボディイメージ対処方略の程度を測定するJ-BICSIの性差の検討を行った。その結果、男性より女性の方が有意に高いことが示された（ $t(325)=11.24$ ， $p<.01$ ， $d=1.24$ ）（Figure 1）。さらに、ボディイメージ対処方略の各方略と性差の検討をするため、ボディイメージ対処方略各について、2（男性・女性） \times 3（外見修正・積極的受け入れ・回避）の2要因被験者間内混合計画の分散分析を行った。その結果、ボディイメージ対処方略の各得点に対して交互作用が有意であった（ $F(2, 650)=12.06$ ， $p<.01$ ）。そこで、単純主効果検定及び多重比較検定を行った結果、男性よりも女性においてボディイメージ対処方略は頻繁に行われ、女性においては外見修正が最も用いられる対処方略であることが明らかとなった。

Table 1 探索的因子分析における日本語版 BICSI の
因子別項目内容と各因子の因子負荷量, 因子間相関

項目内容	I	II	III
I. 外見修正 ($\alpha=.87$)			
5.私は自分の外見で気に入らない所を隠す、または隠蔽するために特別な努力をする。	0.72	-0.07	0.08
2.私は自分の外見について好きではない箇所を変えようと必要以上に時間を費やす。	0.71	-0.02	-0.01
7.私は自分の外見で気に入らない所をいかにして隠蔽しうるかについて考える。	0.71	-0.08	0.20
6.私は自分が最高に見えるよう特別な努力をする。	0.69	0.06	-0.17
4.私は自分の容姿を身体的に魅力的な人々のそれと比較する。	0.69	-0.07	0.13
9.私は鏡の前でより多くの時間を費やす。	0.66	0.00	0.02
1.私はより魅力的に見えるよういろいろと試す。	0.62	0.16	-0.31
3.私は自分の外見を変えるために何をすべきか考える。	0.57	0.08	-0.16
8.私は違う外見を持つことについて空想にふける。	0.55	-0.03	0.13
10.私は他の人々に、自身の外見についての安心を求めようとする。	0.50	0.03	0.12
II. 積極的受け入れ ($\alpha=.87$)			
19.私はその状況はそれほど重要ではないと自分自身に言い聞かせる。	-0.09	0.77	0.04
17.私は自分がどのように見えるのかよりも重要なことがあると自分自身に言い聞かせる。	-0.07	0.69	-0.13
13.私はその状況はいつか通り過ぎると自分自身に言い聞かせる。	0.00	0.69	0.05
20.私は特に自分自身に忍耐強くあろうとすることで反応する。	-0.06	0.59	0.15
15.私は自分の長所を自分自身に思い出させる。	0.12	0.59	-0.22
18.ただ私が物事に対して非理性的なだけだと自分自身に言い聞かせる。	0.03	0.58	0.16
12.私はおそらく状況に過剰に反応しすぎているだけだと自分自身に言い聞かせる。	-0.02	0.58	0.25
16.私はその状況がなぜ私を挑発したり怖がらせるのかを理解しようとする。	-0.02	0.55	0.02
21.私は人として自分の気分を良くさせる何かを意識的に行う。	0.07	0.54	-0.12
14.私は自分が思っているよりもおそらく自分が良く見えると思うと自分自身に言い聞かせる。	0.04	0.53	-0.03
11.私はしばらくすれば気分が良くなることを自分自身に思い出させる。	0.04	0.53	0.08
III. 回避 ($\alpha=.75$)			
29.私はその状況について何をしても無力だと自分自身に言い聞かせる。	-0.02	0.03	0.68
27.私は鏡の中の自分を見ることを避ける。	-0.04	-0.05	0.63
26.私は引きこもり、他人との交流が減る。	-0.03	-0.09	0.57
23.私はその状況と私の気持ちを無視しようとする。	0.04	0.10	0.52
25.私は自分の考えや感情を無視しようとする。	-0.03	0.08	0.47
28.私はその状況をうまく扱う手助けとして何かを食べる。	0.19	0.10	0.38
24.私は過食という形で反応する。	0.27	-0.03	0.37
因子間相関	I	II	III
I	1.00	0.41	0.23
II	0.41	1.00	0.23
III	0.23	0.23	1.00

Table 2 性別別 J-BICSI の 3 因子と各指標との相関係数

		J-BICSI						
		合計		外見修正		積極的受け入れ		回避
指標	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
J-BICI 合計	N=161 0.60 **	N=166 0.51 **	N=161 0.59 **	N=166 0.70 **	N=161 0.37 **	N=166 0.00	N=161 0.40 **	N=166 0.35 **
容姿の問題に対する女全確 保行動	0.66 **	0.49 **	0.67 **	0.75 **	0.45 **	-0.01	0.34 **	0.23 **
容姿の問題からの回避行動	0.54 **	0.43 **	0.44 **	0.52 **	0.36 **	0.00	0.43 **	0.39 **
容姿への否定的評価	0.36 **	0.43 **	0.39 **	0.57 **	0.17 *	0.00	0.26 **	0.31 **
ASI-R 合計	0.55 **	0.51 **	0.71 **	0.77 **	0.35 **	0.04	0.10	0.17 *
自己評価の特徴	0.56 **	0.51 **	0.63 **	0.70 **	0.36 **	0.04	0.22 **	0.28 **
動機付けの特徴	0.42 **	0.42 **	0.66 **	0.74 **	0.25 **	0.04	-0.06	0.00
ローゼンバーグ自尊感情尺度	-0.06	-0.01	0.02	-0.04	0.13	0.32 **	-0.39 **	-0.43 **
EAT-26	0.10	0.29 **	0.09	0.41 **	0.03	0.00	0.11	0.18 *

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

(Figure2)。

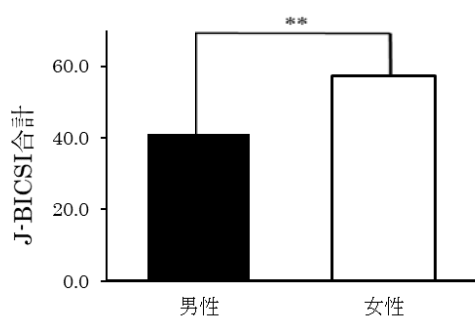


Figure 1 J-BICSI 合計の性差

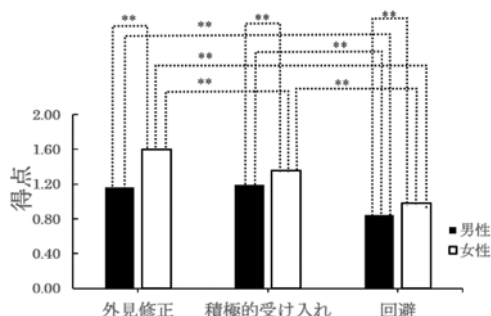


Figure 2 ボディイメージ対処方略の各方略得点

考察

1. J-BICSIの尺度構成と信頼性の検討

作成したJ-BICSI項目について先行研究 (Cash et al., 2005) を参考に3因子を仮定し、確証的因子分析を行った。その結果、先行研究と全く同じ因子構成が得られたものの、モデル適合度が不十分であった。そこで、本項目を用いてより適合度の高い尺度構成を目指し検討を行った。まず、I-T相関の結果から1項目の削除や、固有値スクリー基準の結果から単因子構造や3因子構造を仮定し探索的因子分析を行った。その結果、3因子計28項目において最も高い適合度が得られたため、このモデルを採用した。それぞれの因子は、原尺度を参考に「外見修正」、「積極的受け入れ」、「回避」と命名した。各下位尺度の信頼性は十分な値を示した。

2. J-BICSIの妥当性の検討

性別別の構成概念妥当性の検討を行った結果、男性においてはJ-BICI, ASI-Rにおいては先行研究

と同程度の相関が示されたが、自尊感情尺度と外見修正との間では相関がみられず、EAT-26においては全ての方略との間で相関がみられなかった。EAT-26との相関がみられなかった要因として、日本語版EAT-26は神経性やせ症のうちの過食・排出型や神経性過食症の一部に特異的な下剤乱用などの排出行動の質問項目が含まれていないため、高校生や大学生に多い過食症をとらえられない可能性があることや (向井ら, 1994), EAT-26は摂食障害のハイリスクのスクリーニングに関して用いられるため (岡本・三宅・吉原, 2013), 本研究においてはハイリスク基準値の男性が含まれず、ほとんどの男性がEAT-26に低く回答していたため得点に偏りがあった可能性が考えられる。実際、男性においてEAT-26は床効果がみられた。次に女性においてはJ-BICIと外見修正・回避、動機付けの特徴 (ASI-R) と外見修正、自尊感情尺度と積極的受け入れ・回避、EAT-26と外見修正・回避においては先行研究と同程度の相関が示されたが、外見修正は自尊感情尺度との間及び、積極的受け入れはJ-BICI、自己評価の特徴 (ASI-R), EAT-26との間で相関がみられず、先行研究とは異なる結果となった。「外見修正」と自尊感情尺度との間に相関が見られなかった要因として高坂 (2017) の研究に基づいて考察すると、「気分の高揚」を理由とした化粧は、容姿に対する劣等感低減する一方で、「欠点の隠匿」を理由とした化粧は、容姿に対する劣等感をかえって強める。このことから、本研究における女子大学生には、外見修正を行う理由としてこれらの要因が混在していたことから、外見修正と自尊心との間に相関が見られなかった可能性が考えられる。「積極的受け入れ」において、先行研究と同様の結果が得られなかった要因としては、項目の日本語表現の影響が考えられる。本研究にあたっては、正確に翻訳はしたものの、自ら進んで受け入れるといった印象よりも、自分自身を無理やり納得させる意味と捉えられる項目が多く含まれていた。そのため、人によっては「受け入れ」というよりも「抑制」といった印象で捉えられてしまった可能性が考

られる（例「私はその状況はそれほど重要ではないと自分自身に言い聞かせる」等）。他方、自尊心と強い相関が得られた点については先行研究と一致していた（Cash et al., 2005）。「積極的受け入れ」に関しては項目内容の修正・洗練をしていく必要があるもののJ-BICSIの妥当性はある程度認められといえる。

3. ボディイメージ対処方略の性差

研究 I にて作成したJ-BICSIをもとに、ボディイメージ対処方略使用の性差を検討した。先行研究同様、男性よりも女性において有意にボディイメージ対処方略を使用していることが示された。次に、ボディイメージ対処方略の各方略において性差を検討したところ、先行研究同様「外見修正」、「積極的受け入れ」、「回避」全ての方略において男性より女性の方が、有意に得点が高いことが示された。概ね想定通りの結果であり、女性においてボディイメージ対処方略を使用することが確認された。

以上のことから男性と比較し女性はよりボディイメージ対処方略を使用することが示され、特に女性は「外見修正」による対処を用いることが本研究 I で明らかとなった。このことから、「外見修正」は女性に特徴的な問題であることが考えられる。

研究 II 方法

1. 調査参加者

女子大学生340名（平均年齢=20.14歳，SD=1.38）。

2. 調査期間

2019年12月3日～12月24日

3. 指標

①フェイスシート，②普段の外見修正の頻度を尋ねる質問項目，③日本語版BICSI（研究 I にて作成），④青年期女性の外見に関する否定的感情測定尺度—特性版—（安保ら，2014），⑤醜形恐怖心性尺度（大村ら，2015）（醜形恐怖心性尺度

は「容姿に対する評価懸念」「容姿に対する関心集中」の2因子からなり，計9項目で構成）を使用した。

4. 手続き

調査者の教示のもと講義時間内に集団一斉方式で実施した。

結果

「外見修正」と「身体不満足感」が「醜形恐怖心性」に及ぼす影響と関係を検討するため，独立変数を「外見修正」，従属変数を「醜形恐怖心性合計」及び，「容姿に関する評価懸念」「容姿に対する関心集中」，媒介変数を「身体不満足感」とし，それぞれ媒介分析を行った。加えて，間接効果を検討するために，ブートストラップ法もそれぞれ行った。分析の結果，「外見修正」から「身体不満足感」（ $\beta=.42, p<.01$ ），「身体不満足感」から「醜形恐怖心性合計」（ $\beta=.12, p<.01$ ）に対する正の影響はそれぞれ有意であり，「外見修正」から「醜形恐怖心性合計」への正の影響も有意であった（ $\beta=.62, p<.01$ ）。また，間接効果は有意傾向であった（ $Z=2.09, p<.05$ ）ことから，外見修正は身体不満足感を媒介して，醜形恐怖心性合計を高めることが示された（Figure 3）。

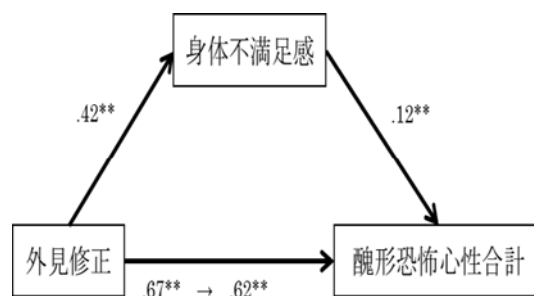


Figure 3 外見修正が身体不満足感を媒介して醜形恐怖心性合計に及ぼす影響

「外見修正」から「身体不満足感」（ $\beta=.42, p<.01$ ），「身体不満足感」から「容姿に対する評価懸念」（ $\beta=.18, p<.01$ ）に対する正の影響はそれぞれ有意であり，「外見修正」から「容姿に対する評価懸念」への正の影響も有意であった（ $\beta=.43, p<.01$ ）。また，間接効果は有意であった

($Z=2.79, p<.01$)。よって、外見修正は身体不満足感を媒介して、容姿に対する評価懸念を高めることが示された (Figure 4)。

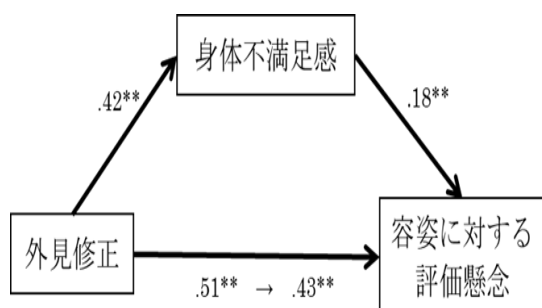


Figure 4 外見修正が身体不満足感を媒介して容姿に対する評価懸念に及ぼす影響

「外見修正」から「身体不満足感」($\beta=.42, p<.01$) に対する正の影響は有意であり、「外見修正」から「容姿に対する関心集中」への正の影響も有意であった ($\beta=.65, p<.01$)、「身体不満足感」から「容姿に対する関心集中」($\beta=-.01, n.s.$) に対する正の影響はみられなかった。また、間接効果もみられなかった ($Z=-.01, n.s.$)。よって、外見修正は身体不満足感を媒介せずに、容姿に対する関心集中を高めることが示された。

考察

研究Ⅱでは女子大学生を対象に、「外見修正」、「身体不満足感」、「醜形恐怖心性」の関連に対する因果関係の検討を行った。具体的には「①外見修正は身体不満足感を媒介して醜形恐怖心性合計に影響を及ぼす」、「②外見修正は身体不満足感を媒介して容姿に対する評価懸念に影響を及ぼす」、「③外見修正は身体不満足感を媒介し容姿に対する関心集中に影響を及ぼす」の仮説の検証を行った。独立変数を「外見修正」、従属変数を「醜形恐怖心性合計および3下位尺度」、媒介変数を「身体不満足感」とし、媒介分析を行った。その結果、外見修正は身体不満足感に対し部分媒介を示し、醜形恐怖心性を増悪させるといったプロセスが示された。さらに、醜形恐怖心性の下位尺度である「容姿に対する評価懸念」および「容姿に対する関心集中」への「身体不満足感」の媒介効果の検

討を行ったところ、「容姿に対する評価懸念」には部分媒介を示したが、「容姿に対する関心集中」には媒介を示さなかった。

以上の結果より、①「外見修正は身体不満足感を媒介し醜形恐怖心性に影響を及ぼす」、②「外見修正は身体不満足感を媒介し容姿に対する評価懸念に影響を及ぼす」という2つの仮説は支持されたものの、③「外見修正は身体不満足感を媒介し容姿に対する関心集中に影響を及ぼす」は支持されなかった。「外見修正」は、嫌悪的な外見関連の認知および感情を一時的に減らす不適応的対処方略であり (Cash et al., 2005)、外見修正を用いることでボディイメージ不満を否定的に強化し、ボディイメージの苦痛を永続させることが示されている (Cash et al., 2011)。つまり本研究では「外見修正」が、ボディイメージ下位概念である「身体不満足感」に影響を及ぼしていたことから、先行研究と同様の結果が確認された。さらに、外見修正は身体不満足感を媒介し、「醜形恐怖心性」及び「容姿に関する評価懸念」に影響を与えていたことから、外見修正の安全行動としての機能が確認された。つまり、良かれと思って外見修正をすることで、容姿への否定的感情が強まり、かえって醜形恐怖心性を高めてしまうといったプロセスが確認された。

これまで、外見修正がボディイメージ障害を増悪させていることや (Cash et al., 2005, 2011)、女性に特有の隠すことを理由とした化粧行動は容姿に対する劣等感に影響を及ぼすこと (高坂, 2017)、女性において身体不満足感とBDDが正の相関を示していること (Biby, 1998; 田中, 2012) などそれぞれについての関連は示されてきていたが、「外見修正」、「身体不満足感」、「醜形恐怖心性」の3つの因果関係と外見修正の安全行動としての機能を実証したものは見当たらなかった。外見修正と醜形恐怖心性を繋ぐ、より具体的な媒介変数が特定されたことで、今後の臨床的介入への示唆が得られたと考える。特に、BDDにおける安全行動の役割を明確にすることは、CBTによる効果的な支援を提供する上で不可欠であると言え

る。安全行動に対するCBTの一般的アプローチとして、暴露反応妨害法がある。外見修正が安全行動であることが明らかにされたことによって、外見修正に焦点を当てた介入の可能性が広がる点においても意義のあるものだろう。

しかし、本研究においては容姿に対する関心集中には身体不満足感が影響を及ぼさないことが明らかとなった。外見修正が「容姿に対する関心集中」に対して身体不満足感の媒介効果を示さなかった原因として、大村ら（2015）は、「容姿に対する評価懸念」は他者を意識するという側面を反映し、「容姿に対する関心集中」は、あくまでも自分の容姿に対するこだわりの強さを反映しており、他者を意識するという側面は含まれていないと述べている。このことから、「容姿に対する評価懸念」因子は自意識の中でも公的自意識の側面を反映し、「容姿に対する関心集中」因子は私的自意識を反映した因子であることが考えられる。つまり、外見修正を行うことによって身体不満足感が高まり、他者を意識した公的自意識には影響を及ぼすものの、私的自意識には影響を及ぼさない可能性が考えられる。これらのことから、容姿に関する関心集中において媒介効果が示されなかった可能性が考えられる。

さらに、大村ら（2015）の研究によると、「容姿に対する評価懸念」因子においては、強迫傾向および対人恐怖心性と有意な正の相関が確認されたものの、「容姿に対する関心集中」因子では抑うつおよび強迫傾向、対人恐怖心性と有意な相関は示されなかった。つまり、「容姿に対する関心集中」と比較して「容姿に対する評価懸念」が、より病理に発展する要因である可能性が考えられる。

高坂（2017）の研究においても、他者視点優位な自己評価を行うほど、劣等感が強まることから、外見修正は他者を意識した「容姿に対する評価懸念」に、より影響を与えることが考えられる。Veale（2004）のBDD認知行動モデルにおける典型的な否定的気分では、自身の容姿と他者の容姿を比較した際や、

他者からどのように見られるのか、どのような屈辱を受けるのか、または拒否される可能性を予測した際に否定的感情を抱くことから、対人関係場面における自己を意識していることが考えられる。

以上のことから、外見修正が「容姿に対する関心集中」に対して身体不満足感の媒介効果を示さなかったと考えられる。

以下限界点についても何点か指摘できる。研究Ⅱでは、外見修正の安全行動の機能の可能性の検討および、外見修正と醜形恐怖心性合計および下位尺度における身体不満足感の媒介効果の検討を行った。その結果、「外見修正が身体不満足感を媒介し醜形恐怖心性合計に影響を及ぼす」という部分媒介モデルおよび、「外見修正が身体不満足感を媒介し容姿に対する評価懸念に影響を及ぼす」という部分媒介モデルが示され、外見修正の安全行動の機能が確認された。しかし、いずれも完全媒介ではなく、部分媒介であり、身体不満足感を介さない外見修正の直接効果の方が大きかった。要因として、外見修正は身体不満足感といった感情的側面よりも、容姿に対する評価懸念といった思考的側面に、より影響を与える可能性が考えられる。実際、SADモデルにおいても「安全行動」は第三者の自己注目に影響を及ぼし、自動思考を促進させ、安全行動を助長させている。このように、「外見修正」においても、否定的感情と比較し他者視点の自己注目による思考に、より影響を及ぼしている可能性が考えられる。

また、本研究Ⅱにおいて男性は対象に含めなかった点も指摘できる。普段の外見修正の使用頻度に関して男性の回答も得ることによって、普段の外見修正の男女差も検討することができ、研究Ⅰにおいて確認された男女差をより裏付ける結果が得られた可能性が考えられる。さらに外見修正と醜形恐怖心性に対する身体不満足感の媒介効果として「自意識」の関わりがうかがわれたことから、「公的自意識」と「私的自意識」の2側面との関連を含めた検討を行うことでより詳細な関連が得られる可能性が考えられる。今後は男性も含めた検討を行っていく必要があり、さらに、本モデ

ルの真の妥当性を検証するためには、実際に外見修正を操作した際の身体不満足感、醜形恐怖心性の影響を、実験的に検討する必要があるといえる。

引用文献

- 安保恵理子・須賀千奈・根建金男 (2012). 健常者の身体不満足感の理解と認知行動的介入の可能性, *カウンセリング研究*, 45, 62-69.
- Biby EL (1998). The relationship between body dysmorphic disorder and depression, self-esteem, somatization, and obsessive-compulsive disorder. *Journal Clinical Psychology*, 54, 489-499.
- Clark, D. M. and Wells, A. (1995). A cognitive model of social phobia. In Heimberg, R. G., Liebowitz, M. R., Hope, D. A. and Schneier, F. R. (Eds.), *Social Phobia: diagnosis, assessment and treatment*, 69-93. New York: Guilford Press.
- Cash TF, Santos MT, Williams EF. (2005). Coping with body-image threats and challenges: validation of the Body Image Coping Strategies Inventory., *Journal of Psychosomatic Research* 58(2): 190-9.
- Cash, T. F. (2011). Cognitive-behavioral perspectives on body image. In T. F. Cash (Ed), *Encyclopedia of body image and human appearance*, 334-342. Elsevier Academic Press.
- David Veale (2004). Advances in a cognitive behavioural model of body dysmorphic disorder, *Body Image* 1, 113-125
- 高坂康雅 (2017). 女子青年における容姿に対する劣等感への化粧効果の認識に関する発達心理学的研究, *コスメトロジー研究報告* 25, 138-151
- Lambrow C, Veale D, Wilson, G (2012). Appearance concerns comparisons among persons with body dysmorphic disorder and nonclinical controls with and without aesthetic training. *Body Image*, 9, 86-92.
- 鍋田恭孝 (2004). 容姿の美醜に関する病理—醜形恐怖症を中心に—*こころの科学*, 117, 31-40
- Mukai, T., Cargo, M., & Shisslak, C. M. (1994). Eating attitudes and weight preoccupation among female high school students in Japan. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 35, 677-688
- 岡本百合・三宅典恵・吉原正治 (2013). 大学生の摂食態度について—EAT-26の意味するもの—, *心身医学* 53(2), 157-164.
- 大村美奈子・小島弥生・中田洋二郎・沢宮容子 (2015). 女性の醜形恐怖心性尺度の作成, *Japanese Journal of Applied Psychology*, Vol. 40, No. 3, 186-193
- 桜井茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度 日本語版の検討, *発達臨床心理学研究*第12巻
- 田中勝則・有村達之・田山淳 (2011). 日本語版 Body Image Concern Inventoryの作成, *心身医学*, 51, 162-169
- 田中勝則 (2012). 大学生による身体不満足感と身体醜形懸念, *弘前大学教育学部紀要*第108号, 131 - 139

The Influence of Appearance Fixing on Body Dysmorphic Tendency —Mediation of body dissatisfaction—

Midori TOKASHIKI*, Yoshinori ITO**, Shogo TOMORI***, Masaya ICHII****

*Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education

**Associate Professor of Faculty of Humanities and Social Science Psychology program, University of the Ryukyus

***Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of the Ryukyus, Doctoral Program in Human Sciences

****Center for Development and Clinical Psychology, Hyogo University of Teacher Education

Body Dysmorphic Disorder (BDD) is a condition in which a person is distressed about his or her appearance as being unusually ugly (Nabeta, 2004), and the mild BDD characteristics in healthy individuals are called the Body Dysmorphic Tendency (Ohmura et al., 2015). People with the Body Dysmorphic tend to overly hide or change the aspects of their appearance that they are concerned about. The present study aims to examine the influences of appearance fixing on body dysmorphic with university students. In the Study I, a Japanese version of the scale measuring appearance fixing was developed. 329 university students completed the scale, and sufficient reliability and validity were obtained. In Study II, the data collected from 340 female university students were analyzed using a causal mediation analysis with body dissatisfaction as a mediating variable, and mediation was shown in fear for negative evaluation about appearance. The process of appearance fixing may increase negative feelings toward one's appearance, which in turn may lead to the Body Dysmorphic Tendency. We concluded that the present study is significant since it showed that appearance fixing is a security seeking behavior, and the finding implies the possible intervention focusing on appearance modification.

Key word : Body Dysmorphic Disorder(BDD), Appearance Fixing, Body Dysmorphic Tendency